

史料紹介

学校法人立命館所蔵藤井永観文庫『現図曼荼羅四角八葉事』の紙背——白氏文集と書状——

源城 政好（帝塚山大学人文学部教授）

E-mail genjo@tezukayama-u.ac.jp

要旨

建仁2年(1202)に理延が書写した「現図曼荼羅四角八葉事」は、元来宝莊嚴院に伝来したものである。元徳2年(1330)に後醍醐天皇によって宝莊嚴院が東寺に寄進されたため、東寺の所蔵に帰した。料紙の紙背が「白氏文集」と書状などであり、それらを翻刻するとともに、書状のうち1通が筑後国三潆庄の初見史料であることを紹介するものである。

abstract

"Genzu mandara shikaku hachiyo no koto(On the esoteric Buddhist Mandala)" which Rien transcribed in 1202(Kennin 2), was written on the backside of letters in Hosogonin Temple. Emperor Godaigo gave ownership of Hosogonin Temple itself to Toji Temple in 1330(Gentoku 2), and "Genzu mandara shikaku hachiyo no koto", therefore, become owned by Toji Temple. It was transcribed on "recycled" paper, which were originally letters and the collection of poems by Bo Juy, called Hakushi monju. In this research paper, I reprint them, and show that one of the letters, which is written about Chikugo country Mizuma Estate, has never been seen before.

はじめに

学校法人立命館所蔵藤井永観文庫に、「現図曼荼羅四角八葉事」と書かれた題簽をもつ一巻がある（以下、本史料を『事書』と呼称する）。『事書』には、以下のような奥書があつて、成立が鎌倉時代であることが知られる。⁽¹⁾

未練末資新拭老眼所令抄後見勿咲之興然七十時九歳

写本者

正治元年十二月十九日以勸修寺御房草本書了

建仁二年四月廿三日未時許於淨福寺

為令法久住染筆 理延記之

（朱筆）

同廿四日酉時一校了、「同廿五日於北房未時点」

（梵字）

同廿五六七之間、於同処□□□等

令図了、偏為令法久住也、

現世安穩、後生善處、法界無差

平等利益、南無阿弥陀仏々々、

扶病身役愚眼 釈理延記之

文永二年三月比伝領

金剛仏子行円

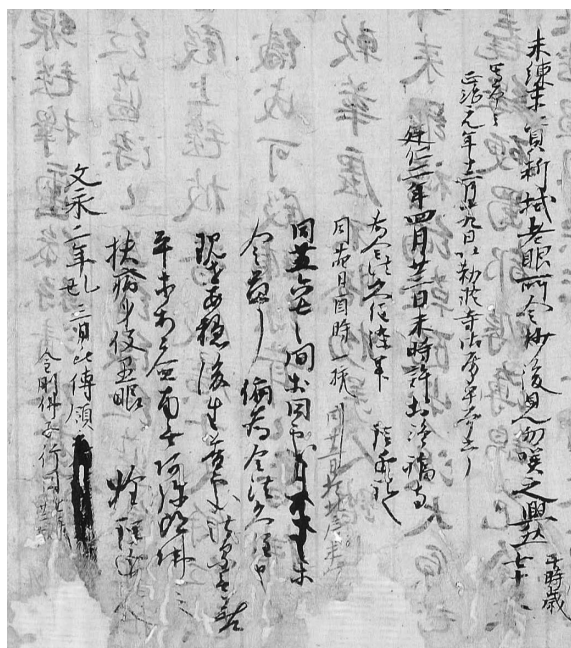


図1 奥書

本『事書』はすでに『大正新脩大藏經 図像部一』に「京都東寺宝菩提院本」として写真版で収録されている。また、興然撰「五十卷鈔第一金剛界法」(『真言宗全書』二十九所収)には「現図曼荼羅四角八葉事」以下、『事書』の全文が収められており、『事書』が「五十卷鈔第一金剛界法」の一部であることが知られる。なお、「五十卷鈔第一 金剛界法」には次のような奥書がある。²⁾

未練末資打拭老眼所令抄、後見勿咲之 興然_{于時九}

正治元年五月 日以勝公令清書之

これらのことから、勧修寺御房と通称されていた興然(一一二一—一二〇三)が七十九歳の年、すなわち正治元年(一一九九)に書写した草本を、同年十二月十九日に某が書写し、その草本を、理延が借り受け、浄福寺において建仁二年(一二〇二)四月二十三日に書写し、その書写本を文永二年(一二六五)三月頃に行円が伝領したということになる。奥書最後部二行分、すなわち行円記載部分を除いて、全文同筆で書かれている。

なお、朱筆での校合もなされているが、奥書の朱筆部分の記載から建仁二年四月二十五日の校合かと思われる。

『事書』の料紙は、反古となった白氏文集を書写した料紙や書状の紙背が使われている。同文庫には四幅の白氏文集切が所蔵されているが、その内三幅の筆跡が『事書』紙背の白氏文集と同筆である。その三幅を納めた各箱の蓋裏には「建仁二年書写 現図曼荼羅四角八葉事 裏文書」と記され、『事書』を切断して表具したことを明示している。

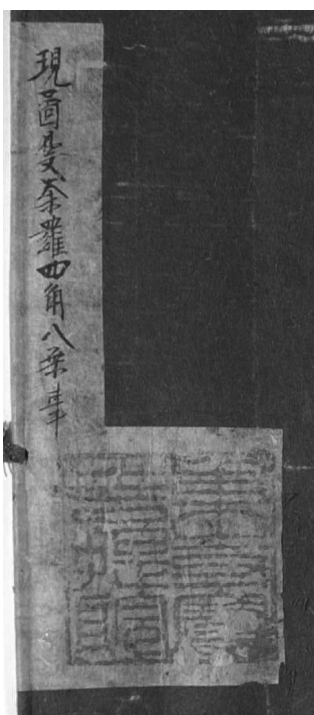


図2 題簽・方印

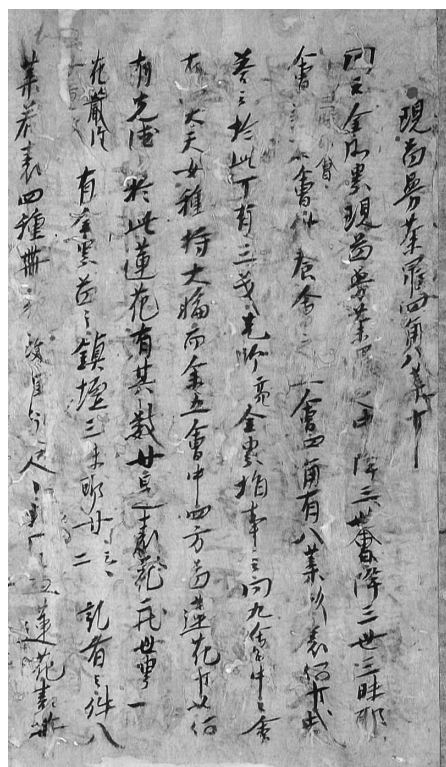


図3 巻頭部分

1 『事書』の現在の状態

まず、『事書』の現在の状態を明示しておきたい。

1. 『事書』を納めた箱には以下のような記述がある。永観文庫の所蔵に帰して以後のものではあるが参考までに記しておく。

(箱蓋表墨書)

「東寺宝菩提院本

現図曼荼羅四角八葉事」

(箱蓋裏墨書)

「建仁二年四月廿三日書写ノ

奥書有り 裏面に

白氏文集消息有り」

2. 『事書』は、卷子仕立てになっており、藍紙の表紙をもつ。この表紙は永観文庫所蔵後のものである。本紙には裏打ちがされている。

たのであるが、その裏打ちの紙を剥がし、さらに本紙を二枚に剥いで、間に補修紙を挿入するという修理が施されているために紙背文書を容易に読み取ることができる。

3. 表紙には「現図曼荼羅四角八葉事」と書かれた題簽が貼られ、さらに「東寺宝菩提院」と読める朱字方印が捺された紙が貼られている。本紙第一紙端裏に朱印影が残っていることから、この題簽と朱字方印は、裏打ち紙を剥がした折に切り取って新しく補充した藍紙の表紙に貼り付けたものである。

なお、表紙には永観文庫の所蔵を示すラベルと整理番号ラベルが貼られている。

4. 料紙の貼り継ぎ枚数は十五枚である(表紙は含まず)。本紙寸法は、縦二八・二cm、横四九一・七cmである。十五枚の料紙のそれぞれの横寸法は、以下の通りである。十五枚の料紙の横寸法の合計が、総寸法と合致しないのは、各料紙の貼り合わせの重なり部分があるためである。なお、各紙の最初部と最後部の五文字程度を記しておいた。

第一紙	五〇・三 cm	「現図曼荼羅……」 「一本金次」
第二紙	一〇・九 cm	「大梵天次帝……」 「世天」
第三紙	五・五 cm	「夜魔天……」 「自在之故稱天云々」
第四紙	一〇・九 cm	「惣種子……」 「百八尊」
第五紙	一〇・二 cm	「理覺闍梨云……」 「阿闍」 「金剛部主」
第六紙	一一・六 cm	「密為宝掌……」 「名父不為母」
第七紙	四二・三 cm	「撰無碍經云……」 「性自性清淨」
第八紙	五四・四 cm	「諸地功德故……」 「若拳業等何」
第九紙	五三・一 cm	「理次金剛部……」 「猶初後互具」
第十紙	三五・八 cm	「顯事乎無所……」 「受用三昧」

- 5.
- 第十一紙 四六・二cm 「智也即自受……法性内是故」
 第十二紙 四九・七cm 「有一印会雖……界一切初仏」
 第十三紙 四九・七cm 「菩薩諸賢聖……法然道理非」
 第十四紙 三二・五cm 「真言曰……甘露海云々」
 第十五紙 三八・七cm 「軍荼利軌云……煩惱之火云々」

貼り継いだ各料紙の右上に朱筆で漢数字が書かれているが、紙継ぎを離し、補修紙を入れて虫損箇所を修復後、再び元に戻すときに貼り継ぎ順序を間違えないように数字を記入したと考えられる。朱筆で数字が書き加えられた料紙は以下の通りである。

- 第一紙 「一」
 第二紙 「二」
 第三紙 「三」
 第四紙 なし
 第五紙 「四」
 第六紙 なし
 第七紙 「五(カ)」
 第八紙 「五」
 第九紙 「六」
 第十紙 「七」
 第十一紙 「八」
 第十二紙 「九」
 第十三紙 「十」
 第十四紙 なし
 第十五紙 「十二」

- 6.
- 料紙は、すでに述べたように反古となった書状や白氏文集を書写した料紙の裏面が使われている。その使用料紙、すなわち紙背の

内容は以下の通りである。三幅の「白氏文集切」を、紙背に書かれた『事書』の文章と「五十巻抄」の文章を参照して本来の位置に挿入した。数字は、漢数字は現在の紙順を、○内数字は元の紙順を表している。

- 一①紙背 白氏文集「母子別」(八行)・「陰山道」(十行)
 行間に『事書』の注記(五行) あり
 二②紙背 白氏文集「母子別」(四行)
 三③紙背 白氏文集「売炭翁」(十一行 切断)
 四④紙背 白氏文集「海漫漫」(二行)
 五⑤紙背 白氏文集「鐔綾」(四行)
 行間に『事書』の注記(三行) あり
 五⑥紙背 白氏文集「鐔綾」(三行)
 行間に『事書』の注記(四行) あり
 六⑦紙背 白氏文集「海漫漫」(三行)・「立部伎」(二行)
 行間に『事書』の注記(五行) あり
 七⑧紙背 白氏文集「杜陵叟」(八行)・「鐔綾」(八行)
 行間に『事書』の注記(一行) あり
 八⑩紙背 後十二月十八日付右衛門権佐顕遠書状
 某書状
 九⑨紙背 建仁元年九月二十三日付弟子桑門某諷誦請文
 十⑪紙背 三月四日付見王丸かな消息
 十一⑫紙背 行間に『事書』の注記(十行) あり
 某書状
 十二⑬紙背 某書状
 十三⑭紙背 三月二十六日付某書状
 十五⑮紙背 「上陽白髮人」(十五行 切断)
 白氏文集「華原磬」(五行 切断)

⑬紙背 白氏文集「華原磬」(八行 切断)

十四⑭紙背 白氏文集「立部伎」(十二行)

十五⑮紙背 白氏文集「牡丹芳」(一行)・「紅線毯」(十三行)

なお、白氏文集書写の料紙には、横二・八〜二・九cm、縦二五・三cmの罫線が薄墨で引かれている。

7.

『事書』の修復時に紙背の白氏文集の一部を切断して掛幅装にしている。切断した三幅の「白氏文集切」の紙背に『事書』の一部が読み取れ、さらに、その文章が『事書』に見られないことから、白氏文集切として掛幅装にすることが可能な部分を切断したと思われる。その切断箇所は、6で明らかのように第二紙と第三紙の間、および第十三紙と第十四紙の間である。

なお、現在の紙継ぎは、『大正新脩大藏經 図像部一』所収の写真版と比較したところ、第八紙と第九紙の順序が相違している。5で記した朱書きの数字は順序通りであるので、紙継ぎ順序を記載した折に間違いがあったのだろう。

2 『事書』紙背の「白氏文集切」について

白氏文集は、唐の白居易(白樂天 七七二〜八四六)の七十五巻よりなる詩文集で、「白氏長慶集」・「白氏後集」・「白氏続後集」をあわせて称される。八四五年に成立をみ、七十一巻が現存する。平安初期に日本にも伝来し、「長恨歌」や「琵琶行」はことによく知られている。『枕草子』(二二一段)にも「書は、文集・文選・新賦・史記・五帝本紀・願文・表・博士の申文」とあり、白氏文集は貴顕の必読書として認識されており、日本文学に与えた影響には多大なものがある。なお、日本には唐代

写本を忠実に筆写した重鈔本が多く現存する。⁽³⁾

『事書』の紙背の多くは白氏文集を筆写したものである。「海漫漫」・「立部伎」・「華原磬」・「上陽白髮人」・「牡丹芳」・「紅線毯」・「杜陵叟」・「繚綾」・「売炭翁」・「母別子」・「陰山道」が、同筆で書写されており、いずれも新樂府に分類される詩群に属するものである。料紙には薄く罫が引かれ、一行あたり十二〜十五の文字数である。

白氏文集切の部分のみでいえば、「華原磬」・「上陽白髮人」・「売炭翁」が切断されて、それぞれ別々に掛幅装にされている。

なお「立部伎」・「繚綾」も詩の全文が書写されて残っているが、詩文の行間に『事書』の注記が挿入記載されているので、白氏文集切として切断して掛幅装とすることを断念したと思われる。『事書』を切断して掛幅装とした「白氏文集切」は以下の通りである。

白氏文集切「華原磬」一幅(縦二七・五cm 横三四・九cm)

(内箱蓋表墨書)

「東寺本／新樂府切 華原の磬」

(内箱蓋裏墨書)

「建仁二年書写 現図曼荼羅四角八葉事／裏文書」

(注) 紙背に『事書』二十二行あり。

「懸一聴……」と「臣果然……」の間が紙の継ぎ目であり、「懸一聴……」の紙背の上部に朱筆で「十一」と書かれているようであるが、朱が滲んでおり判然としない。

華厚磬 刺樂工非其人也

華原磬華原磬古人不聴今人

聴泗浜石々々今人不撃 古人撃

古人何不同用之捨之由樂工々々豈

有耳如壁不分清濁即為聾梨園
弟子調律呂知有新声不知古々称
浮磬出泗滨立弁致死声感人宮
懸一聽華原石君心遂忘刻引彊
臣果然胡寇從燕起武臣少肯封
彊彊死始知樂與時政通豈聽鏗
鏘而已矣磬襄入海去不歸長安
市兒為藥師華原磬與泗滨石清
濁兩声誰得知

白氏文集切「上陽白髮人」一幅（縦二七・六cm 横四〇・六cm）

（箱蓋表墨書貼紙）

「東寺本／白氏文集切 上陽人」

（箱蓋裏墨書貼紙）

「建仁二年現図曼荼羅四角／八葉事裏文書」

（注）紙背に『事書』二十二行あり。

最終行上部の紙背に朱筆で「十一」と書かれている。

上陽白髮人 愍怨曠也

上陽人紅顔暗老白髮新緑衣

監使守宮門一閉上陽多少春玄

宗末歲初選入時十六今六十同時

採摺百余人零落年深殘此身憶

昔吞悲別親族扶入車中不敢哭皆

云入内必承恩臉似芙蓉胸□玉未

容君王得見面已被楊妃遙側目妬

令潜配上陽宮一生遂向空床宿秋

夜長々々無睡天不明耿々殘燈背
壁影蕭々暗雨打窓声春日遲々
遲々々独坐天難暮宮鶯百轉愁
獸聞梁燕双栖老休妬鶯歸燕
去情悄然春往秋來不記年唯向
深宮望明月東南四百廻円今日

白氏文集切「壳炭翁」一幅（縦二七・四cm 横三二・四cm）

（内箱蓋表墨書）

「東寺本／白氏文集切 壳炭翁 一幅」

（内箱蓋裏墨書）

「建仁二年現図曼荼羅四角八葉事裏文書」

（注）紙背に『事書』十八行あり。

壳炭翁 苦宮市也

壳炭翁代薪燒炭南山中滿塵

灰煙火色兩鬢蒼々十指黑壳炭

得錢何所營身上衣裳口中食可

憐身上衣正單心憂炭賤願天寒

夜來城外一尺雪曉駕炭車輾氷轍

牛困人飢日已高市南門外泥中歇

翩々兩騎來是誰黃衣使者白衣兒手

把文書口称勅廻車叱牛牽向北一車

炭重千余斤宮使駟將惜不得半疋

紅紗一丈綾繫在牛頭充炭直

なお、同文庫には、『事書』紙背の白氏文集切以外にもう一点、異筆の「白

氏文集切「塩商婦」が蔵されている。料紙に薄く罫が引かれ、一行十四字、五行分で、五行目のみ四字である。すなわち「塩商婦」詩の最後部分の書写である。丁寧に書写され、異本との校合、片仮名による送り仮名もほどこされている。

白氏文集切「塩商婦」 一幅（縦二八・一 cm 横一三・五 cm）

食ヒ濃粧倚抱樓兩頬紅顆花欲綻塩
商婦何幸嫁塩商終日美飲食終歳
好衣裳好衣美食有来処汝須慙愧
桑弘羊々々々死来日已久不独り漢
朝今亦有り
（返点省略）

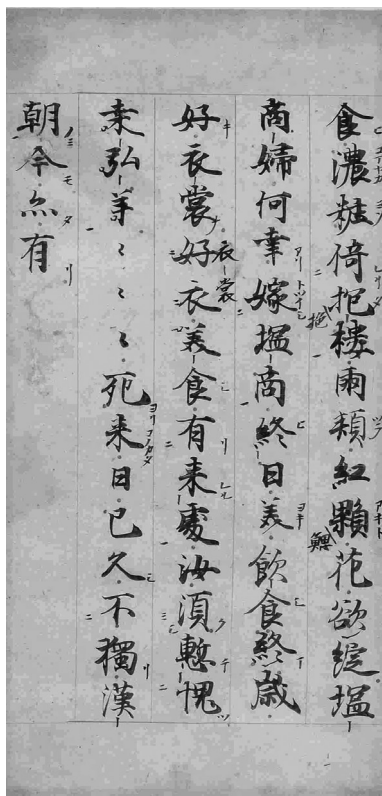


図4 白氏文集切「塩商婦」

3 『事書』紙背の翻刻

凡例

一、翻刻にあたっては、旧字体は新字体に改めた。また異体字等も

おおむね通行の字体に従った。

一、白氏文集の文字列を考慮して本紙の最後紙の紙背から翻刻した。

○内数字は元の紙順である。

一、切断され別表具となっている「白氏文集切」を元の位置に戻し再録した。

一、書状の翻刻にあたっては、適宜読点を付した。

一、改行は原文書に従った。

一、虫損・摩滅により文字が判読できないものは□で示した。また欠失文字数が判明しないものは「」で示した。

一、文字の抹消は■で示した。

一、脱字や文字の間違いはそのままとした。

一、白氏文集書写の料紙には罫線が引かれているが、それは省略した。

一、『事書』の「裏書」が紙背に記されているが、これについては翻刻して注（7）にまとめておいた。

十五¹⁸紙背

吾君憂稼穡（「牡丹芳」詩の最後の五字）

紅線毯憂

紅線毯扱繭繡絲清水煮扱絲□

線紅藍染々為紅線紅藍織作披

香殿上毯披香殿広十丈余紅毯

合織成可殿鋪絲茸々香扱々

線軟華虚不勝物美人踏上□

舞来羅襪繡鞋隨歩没大原毯

洪氎縷硬蜀都褥薄錦花冷不

如此氎溫且柔年々十月來宣州宣

城太守加樣織自謂為臣能竭□

十夫同担進宮中線厚絲多卷不得宣

城太守知不知一丈之氎千兩絲地不知

寒人要煖少奪人衣作地衣（紅線氎）全文

吾君憂稼穡

紅線氎

紅線氎揮霍綵絲清水煮
線紅藍染一為紅線紅藍織作板
香殿上氎板香殿廣十丈餘紅氎
合織成可殿鋪絲茸一香棣
線軟華屈不勝物美人踏
舉來羅襪繡鞋隨步沒大原
氎氎縷硬蜀都褥薄錦花冷不
如此氎溫且柔年々十月來宣州宣
城太守加樣織自謂為臣能竭
十夫同担進宮中線厚絲多卷不得宣
城太守知不知一丈之氎千兩絲地不知
寒人要煖少奪人衣作地衣
婦人索棹長竿太常部伎有

図5 第15紙紙背

十四⑬紙背

嬭巨索棹長竿太常部伎有
等級堂上者坐堂下者立堂上坐
部笛歌清堂下立部鼓笛鳴笙
歌一声衆側耳鼓笛万曲無人聽
立部賤坐部貴坐部退為立部
伎擊笛和雜戲立部又退何所
任始就樂懸操雅音々々替壞何一
至此長令爾輩調宮徵凡丘后
土郊祀時言將此樂感神祇欲
望鳳來百獸舞何北轅轅將適
楚工師愚賤安足云大常三卿爾
何人（「立部伎」前十二字は六⑦紙背にあり）

切断⑬紙背

華厚磬 刺樂工非其人也
華原磬華原磬古人不聽今人
聽泗浜石々々々今人不擊古人擊
古人何不同用之捨之由樂工々々豈
有耳如壁不分清濁即為聾梨園
弟子調律呂知有新声不知古々々
浮磬出泗浜立弁致死声感人宮
懸一聽華原石君心遂忘刻引疆（切断⑬に続く）

切斷(15)紙背

臣果然胡寇從燕起武臣少肯封
疆疆死始知樂與時政通豈聽鏗
鏘而已矣磬囊入海去不歸長安
市兒為藥師華原磬與泗浜石清
濁兩声誰得知

上陽白髮人 愍怨曠也

上陽人紅顏暗老白髮新綠衣
監使守宮門一閉上陽多少春玄
宗末歲初選入時十六今六十同時
採捫百余人零落年深殘此身憶
昔吞悲別親族扶入車中不敢哭皆
云入內必承恩臉似芙蓉胸□玉未
容君王得見面已被楊妃遙側目妬
令潛配上陽宮一生遂向空床宿秋
夜長々々無睡天不明耿耿殘燈背
壁影蕭々暗雨打窓声春日遲々
遲々々独坐天難暮宮鶯百轉愁
獸聞梁燕双栖老休妬鶯歸燕
去情悄然春往秋來不記年唯向
深宮望明月東南四五百迴圓今日

(以下七十五字分欠)

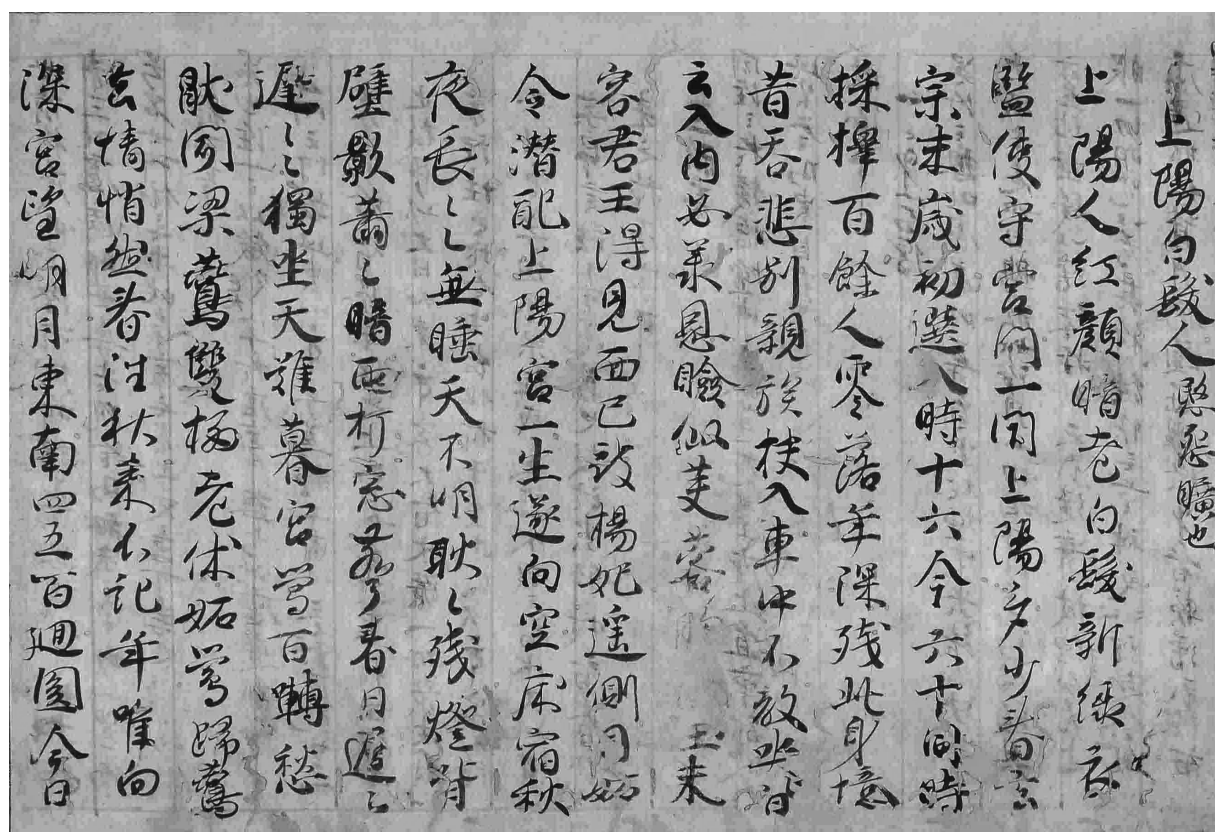


図6 白氏文集切「上陽白髮人」

十三⑭紙背「三月二十六日付某書状」

廿日御札廿四日得拝見候了、
御有様御減氣不候之条無
申限候、

宮御方事、其後不審無極候、
遇意所及候、旁勵懇誠候、

立用以後

抑出京定日兼可蒙仰候、香隆
寺幣功候、法師原少々可来候、

付御意承定日可来之由申遣也
未進御山候程、為相計候如此
令申候也、恐々謹言

三月廿六日



謹上 亮法橋御房

十二⑬紙背「某書状」

高野参詣之後、御意仁等事
候覧、不審尤多候、三七ヶ
日参籠後、来四月朔比可
出京仕候之由令存知候之處、
土用中尚可候御山之由蒙
仰候故、暫延引候也、出京
未承定日候也、来四月御祈ハ
於御山可勤行候也、惣登山
以後奥院御影堂院内入堂

便宜御意事遇意所及能々

祈念申候歟、

次御山参籠間幣坊閑散不可

十一⑫紙背「正月四日付見王丸かな消息」

おんふみくはしくうけ

たまはり候ぬ、ふようのこと

はしさふらはぬ也、この

とうかころまでふような

ちて候へし、そののちへち

のことも候はす、なにことも

をんけようのとき申候

へし

三月四日 見王丸

御返事

十⑪紙背「建仁元年九月二十三日付弟子桑門某諷誦請文」

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施一裹

右為過去幽靈證大菩提□□□□

焉

□滅罪〇、修諷誦祈生善〇、所□□□

豐鐘之逸韻也、高驚諸重□□□

所施者越布之輕賢也、偏「」
寸地之誠、仍所請如件、敬白

建仁元年九月廿三日弟子桑門「」

九⑨紙背「某書狀」

久不令申候、何事候覧、

抑此日来□病之氣□「」

候しか自仏名後朝日殊以「」

大事罷成て候間、自明朝「」

阿弥陀大呪益□て□□「」

誂諸人候処、坊人等事□□□「」

皆辞退候也、□遣心中事には□「」

候へとも此度の御分□之「」

替仰候哉、非御恩者他計「」

略尽て候也、構て／＼可蒙御恩「」

香衆ハ静晧印遍にて候也、毎事「」

□足□為無為候

八⑩紙背「後十二月十六日付右衛門権佐顕遠書狀」

三瀕御庄事被仰

下之旨如此、恐惶謹言

後十二月十八日右衛門権佐顕遠

進上 中納言殿

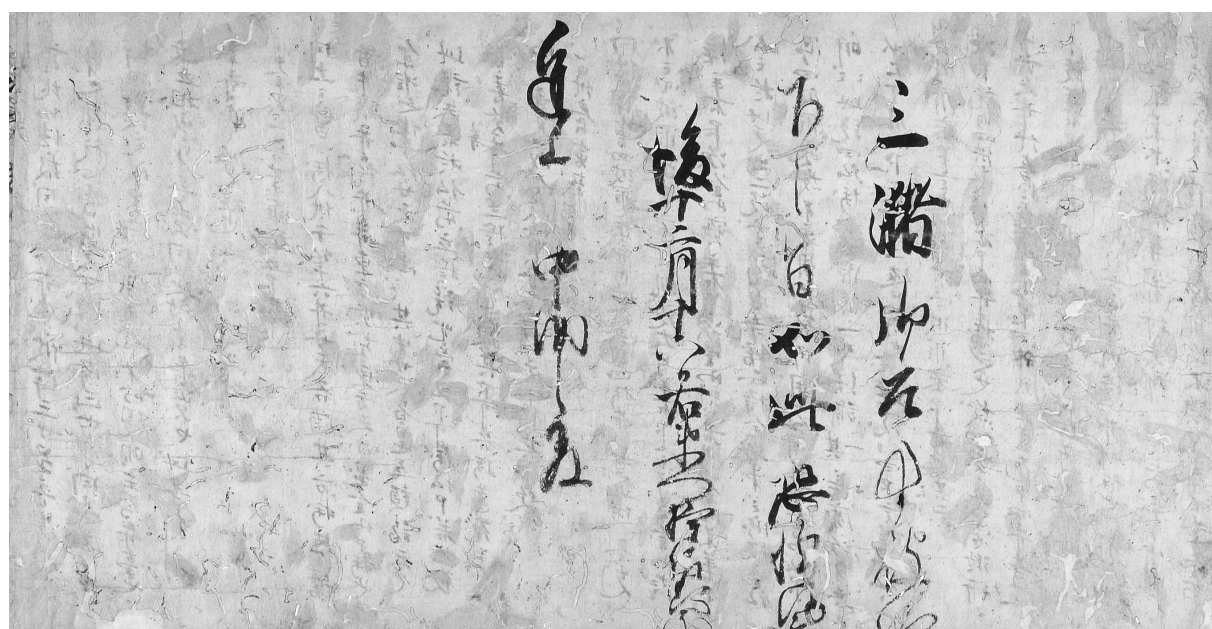


図7 第8紙紙背 藤原顕遠書状

七⑧紙背

求考課「」

衣食將何如剥我身上帛奪我口中粟
虐人害物即豺狼何必鉤爪鋸
牙食人完不知何人奏皇帝々心側
隱知人弊白麻紙上書德音京畿
盡政今秋稅昨日里胥方到門
手持勅牒勝鄉村十家租稅□家
畢虛受吾君蠲免恩（杜陵叟） 前六十一字欠

繚綾

繚綾々々何所似不似羅綃與紈綺
似天台山上明月前四十五尺瀑布
泉中有文章又奇絕地鋪白煙□
簇雪織者何人衣者誰越溪寒女
漢宮姬去年中使宣口勅天上送樣
人間織々為塞北秋雁行染作江南
春水色広裁衫袖長製裙「」〔繚綾〕
以下、五⑥・四⑤紙背に続く

六⑦紙背

風吹蔓草何況玄元聖祖五千言
不言藥不言仙亦不言白日青天
（「海漫漫」）

立部伎 刺雅樂之替也

立部伎鼓笛誼舞双劍跳七丸（「立部伎」
以下、十四⑬紙背に続く）

五⑥紙背

波刀剪雲異彩奇文相隱映輒側
看花々不定照陽舞人恩正深春
霑衣一對直千金汗○粉汚不再着□
〔繚綾〕 以下四⑤紙背に続く

四⑤紙背

土踏泥無惜□繚綾織時費功績
莫比平常繪與帛絲細繚多女手
疼札々千声不盈尺照陽人々々々
不見織時心不惜（繚綾）

三④紙背

福文成多誕誕上元太一虛祠禱
君看驪山塚上杜陵頭畢竟悲（「海漫漫」
以下、六⑦紙背に続く）

切斷③紙背

売炭翁 苦宮市也
売炭翁代薪燒炭南山中滿塵
灰煙火色両鬢蒼々十指黑売炭
得錢何所營身上衣裳口中食可
憐身上衣正单心憂炭賤願天寒

夜来城外一尺雪，曉駕炭車輾氷轍。
牛困人飢日已高，市南門外泥中歇。
翻手兩騎來，是誰黃衣使者白衣兒手。
把文書口稱勅，廻車叱牛牽向北。一車
炭重千余斤，宮使驅將惜不得。半疋
紅紗一丈綾，繫在牛頭充炭直。

二②紙背

母別子 刺新聞旧也

母別子々別母，白日無光哭聲苦。關西驃
騎大將軍，去年破虜新策勲。勅賜金
錢二百萬，洛陽迎得如花人。迎來□□

〔母別子〕一①紙背に続く

一①紙背

棄掌上蓮華，眼中薊寵新棄旧未
足態々在君家。留我二兒一始扶床，一
初坐々啼行哭。牽人衣以汝夫婦新
嫵婉，使我母子生別離。不如林丁鳥鵲
鳥母不失鸛雄，伴雌心似園中桃李。
樹花落隨風，子在枝。新人新人聽我
語，洛陽無限紅樓女。但願將軍別之功
更有新人勝於汝。〔母別子〕

陰山道疾貪虜也

陰山道々々々紇邏敦肥水泉好每至

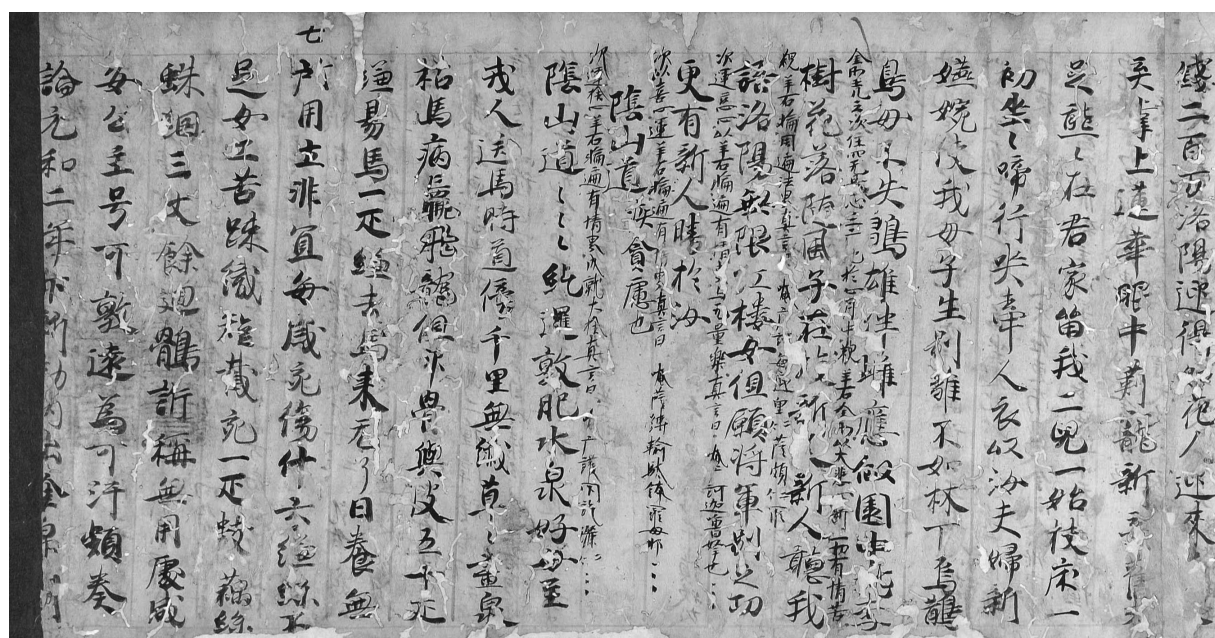


図8 第1紙紙背

戎人送馬時道傍千里無纖草々尽泉

枯馬病羸飛龍但印骨與皮五十疋

縑易馬一疋縑去馬來无了日養無

七 所用立非宜每歲宛傷什六〇縑絲不

足女工苦疎織短截宛一疋数藕絲

蛛網三丈余廻鶴訴称無用処咸

安公主号可敦遠為可汗頻奏

論元和二年下新勅内出金帛酬□〔陰山道〕以下欠

4 後十二月十八日付右衛門權佐顯遠書状（八〇紙背）について

本文書は料紙の下部分が少し切断されているが、「顯遠」という署名の下部が少し欠けている程度なので、さほど本文の文字が欠落しているとは思えない。「顯遠」という署名については、神護寺文書に顯遠の奉書が残されている。京都府立総合資料館が蔵する影写本の写真帳に含まれる次の二通によって顯遠の署名であることを確認した。

（久安三年）六月十日付甲斐守顯遠奉書（『平安遺文』二六一三号）

（久寿二年）正月二十一付左少弁顯遠奉書（『平安遺文』二八〇六号）

顯遠は、仁平二年（一一五二）八月二十九日に右衛門權佐に任じられており、久寿元年（一一五四）十二月二十八日に左少弁となり、翌年二月二十五日に右衛門權佐を辞している。このことから、本文書は閏十二月のある年、すなわち仁平三年のものであることがわかる。

つぎに宛所の中納言であるが、対象者は三人いる。藤原家成・藤原重通・藤原公能である。三瀧庄は、長承元年（一一三二）十月に鳥羽上皇によって建立された御願寺である宝莊嚴院の所領全国十二か庄の一つで

ある。「平治元年（一一五九）潤五月日付宝莊嚴院領莊園注文」（東寺百合文書レ『平安遺文』二九八六号）には三瀧庄について次のように記されている。

筑後国三瀧庄 隆季卿

米六百石

綿四百一十兩

三瀧庄の領家四条隆季は、藤原家成の子息である。家成と鳥羽上皇との関係について、波多野皖三は「西牟田氏考——三瀧庄住人——」において、「上皇と隆季の父中御門中納言家成との関係は、彼が若狭守に任用せられたことを始め、その後の累次の昇給が多く鳥羽院給であったことから、比較的に密であったことが推知され、そのことから宝莊嚴院を本家に仰ぐに至ったのであろうことが想像される」と記し⁴、これをうけて瀬野精一郎は「三瀧庄が四家領となつた事情示す史料は存在しないが、それは隆季の父家成の時代と推定されている。その根拠は家成の累次の昇給が鳥羽院給であったことからわかるように、鳥羽上皇と家成の関係がきわめて親密であったことがわかる。そこで鳥羽上皇の御願寺である宝莊嚴院に三瀧庄を寄進したのも家成であると推定されている。この推定が正しいければ、隆季は三瀧庄領家職を父家成から相伝したことになる」とした⁵。

以上のことから、宛所の中納言は藤原家成がもつともふさわしい。加えて、本文書は、家成が三瀧庄を宝莊嚴院に寄進したことにかかわるものといえる。すなわち、本文書は「平治元年（一一五九）潤五月日付宝莊嚴院領莊園注文」に先行するものであり、現時点においては三瀧庄の初見史料ということになる。

その後の三瀧庄であるが、次の三通の文書が東寺領となる経緯を示すものである。いずれも『東寺百合文書』イ函五一号「宝莊嚴院文書案」

に含まれる文書である。

宝莊嚴院為寺家興隆、所被付当寺也、可令存知給者、天氣如此、仍言上如件

元德二年正月廿八日
中宮亮判

進上 東寺長老僧正御房

（後醍醐天皇綸旨案）

寶莊嚴院執務并敷地、近江國三村庄内嶋郷已下寺領、所被返付当寺也、可存知之由可有御下知之旨、新院御氣色所候也、仍執達如件

忠光
權中納言判
応安七年正月十日

謹上 長者僧正御房

（後光嚴上皇院宣案）

宝莊嚴院執務同敷地寺領等事、就執奏被返付当寺之由承候了、恐々

謹言

応安七
 五月二日
 義満

東寺長老僧正御房

(足利義滿御内書案)

元徳二年（一三三〇）後醍醐天皇によって宝莊嚴院執務職が東寺に寄進され、三瀧庄を含む宝莊嚴院領が東寺領となった。その時、同院に保管されていた「平治元年（一一五九）潤五月日付宝莊嚴院領莊園注文」を含む文書群も東寺に移されたと思われる。もちろん『事書』も東寺に移され、やがて宝菩提院三密藏に納められたのであろう。⁽⁶⁾

おわりに

本『事書』は『大正新脩大藏經 圖像部一』に「京都東寺宝菩提院本」として写真版で収録されており、また、『真言宗全書』二十九所収の興然撰「五十卷鈔第一 金剛界法」に全文が収められていることはすでに述べた。しかし、本『事書』に紙背文書が存在することは、二〇〇六年六月に学校法人立命館が細見美術館で開催した展覧会「藤井永観文庫の優品」の図録で若干言及されているが、詳細については明らかにされてこなかった。紙背文書は「白氏文集」と書状などであり、今回それらの翻刻をおこない、あわせて書状のうち一通が筑後国三潯庄の初見史料であることを明らかにすることができた。

なお、他の書状類の検討も今後の課題として残されており、加えて「白氏文集」の書写された元本がいかなるものであるかについても専門とする研究者のご教示を待たねばならない。

〔注〕

(1)『大日本史料』(第四編補遺 別冊二)建仁二年雜載「題跋」に、本『事書』は東寺三密藏所藏とし、建仁二年部分の奥書が収められている。同じく「題跋」に東寺三密藏所藏「肝要鈔」(甲 金剛界法 興然)の理延の奥書も収められており、参考までに記しておく。

建仁二年六月廿九日、巳時於淨福寺依大卷之間（間カ）、卷舒有煩、而開一卷為甲乙

親理延

(2) 『大日本史料』(第四編補遺 別冊一)「建仁三年十一月三十日勸修寺慈尊院興然寂ス」の項には「肝要抄(三宝院所藏)の奥書が収められているが、「勝公」が「勝然」となっている。

武内孝善「理明房興然伝攷―理明房興然伝記編年史料集―」

〔高野山大学論叢〕第十八巻 一九八三年

(3) 高木正一注『白居易 上下』(岩波書店 一九五八年)

内田泉之助『白氏文集』(中国古典新書 明德出版社 一九六八年)

『日本史大事典』(平凡社 一九九三年)

(4) 『筑紫史論 第二輯』所収 一九七四年

(5) 『筑後国三潯庄の成立と終焉』(鎌倉幕府と鎮西)所収 吉川弘文館

二〇一一年

瀬野精一郎編『九州莊園史料叢書十四 筑後国三潯莊史料』(孔版圖書出版社

一九六六年)

瀬野精一郎『三潯庄』(講座 日本莊園史10 四国・九州地方の莊園) 吉川

弘文館 二〇〇五年)

(6) 宝莊嚴院については、上島有『東寺・東寺文書の研究』(思文閣出版 一九九八年)に詳しい。

(7) (十一)⑫紙背

長慶公作也 此草菴伝受なし也云々

金剛拳大印 唵訖里^三那野末^引瑟多^引薩縛^引但也^引

槃多^引南^{合二}悉地野^{合二}担^引

三昧、薩縛母捺藍^{合二}銘鉢栗野^引婆縛觀

法印 彌瑟鉢羅^{合二}半左縛^引吉悉^{合二}地婆縛觀薩

縛但他^引槃多^引三滿達喻^引銘阿^引野担

羯磨印

阿尾彌野^{合二}駄縛帝銘薩恒縛^引薩縛但他^引槃担

室者^{合二}尾彌野^引地槃磨三縛羅三部担云々

已上真言写本二ハ表書云々愚私書裏之

(七)⑧紙背

撰无碍經云毘盧遮那如来仏部主源之故无母云々

(六)⑦紙背

秘一記云毘盧遮那仏部主源故無母云々

疏五云次於大勤勇北至於維置虚空眼即是毘一

母也○其標幟猶如天女住□□受之像云々

私云撰无□經并秘一云大日源故无母然今虚空眼毘盧一

母云々如何 答以仏眼為仏部母者是胎藏義也五部中

(五)⑥紙背

仏部无母云々三部之中仏部二ハ母仏眼主金輪殿

大原記廿一云問金剛界曼荼一在仏眼那答不可必有曼一中若令メリ有ラ

東方薩菩薩是也云々

相応經云時金剛薩埵対一切如来前忽然現作一切仏母一

(四)⑤紙背

蓮身作日月暉両目微咲二手住臍 如入奢摩他也云々

同經疏中云此印次第先須自成大日具卅七尊印明變成金剛薩

埵^明薩埵變成仏眼仏母云々

(一)①紙背

金剛王軌云次住四无量心三摩地於心月中觀羯磨金剛以大悲心断一切有情苦

觀羯磨輪周遍法界真言曰 唵摩訶每底里^三薩頗^{合二}羅

次運慈心以羯磨輪遍有情界與无量衆真言曰 唵摩訶迦拏也、、、

次以喜心運羯磨輪遍有情界真言曰 唵摩縛輸鉢鉢羅母那、、、

次運捨心羯磨輪遍有情界成就大捨真言曰 唵摩護閉訖漫、、、

〔付記〕

書狀の翻刻にあたっては、下坂守氏(奈良大学)のご助言を得ました。記して謝意を表します。